

広島縫製労連専従34年のあゆみ

広島県・広島縫製労連会長・ 島田 数夫

社会人と学生として出発

昭和32年に呉市広中学校を卒業して呉造船所（現在石川島播磨重工）の養成工として入社した。3年間の養成工期間中も給料がもらえて卒業すれば高卒以上の扱いをしますとの事で応募しました。競争率は高かった。足掛け7年間在職しましたが、広から電車通勤で毎朝6時に家を出て5時に帰宅、夜は定時制高校に通いました。

最初呉三津田高校の定時制に入学したが、慢性胃炎で休みがち、4ヶ月間休学をして翌年広高校定時制の1年生に入学した。社会に出たら中卒になるので高卒の資格が欲しい気持ちで再入学しました。朝は5時過ぎに起きて広から呉造船所へ通い、終わるとすぐ学校へ、学校から帰るのが10時過ぎ、それから養成工での学習の勉強と定時制の勉強をしました。毎日寝るのは11時過ぎでした。この時代は精神的にも肉体的にも苦しく、自殺を考えました、そうしているうちにノイローゼになり3ヶ月間食事も喉を通らず、何にもやる気が起こらない、本当に苦しい時代でした。ノイローゼに薬はありません、自分で治しなさいと医者は言いました。ノイローゼが進むと頭がおかしくなると言われましたが、そこまでいかずにある日突然回復した。今思い返して治ったのは自助努力だったと思います。

我が家は親父が賭け事や女遊びで給料を家に入れない、母は私が物心付いた時から金に苦勞しており、私の給料3,000円を当てにしている状況で私は苦しい日々でした。

定時制高校は戦後の古い木造校舎で夏は窓の隙間から蚊が入って刺す、冬は風の強い日には隙間から粉雪が舞い込んでくる様な環境でした。学校を終えて寒風の中を自転車で帰宅、大きくなって偉くなりたいという気持ちが、この苦しさを乗り越えたようです。

卒業までには中途退学する人も多かった。5年間で高校の卒業資格を取りました。その頃の社会は夜間高校を卒業しても高校卒業資格は認めない中卒扱いでしたので不満でした。卒業後近畿大学呉工学部の2部（夜間）に入学いたしました。2年生になる時に転部、転科試験がありまして試験に合格すれば2部から1部（昼）に行かれる、大阪の学部にも変われる。この試験を受験する前に法山教務部長から学校でお前が受験するのかと言われ「はい」と言ったら「合格するものか」と言われたのが強く記憶に残っています。50人受けて私1人合格しました。この時は本当にうれしかった。今思えば人生最大の喜びでした。なぜなら病気がちでしたので医者に度々通う事からぬけだせる、勉強に専念できると思えば嬉しさがこみあげました。

合計7年間も通った夜学から抜け出される喜び、おてんとう様の下で勉強したかった思い、これで人並みになったと思いました。夜間1年生から経営工学科の昼の2年生になれて昼の卒業が認められる事が嬉しさを増した。大学は1部、2部の差は大きかった、2部入学金で1部に変更し差額を払わなくとも良いと言われ助かりました。近畿大学がこのような機会を与えてくれた事に感謝しています。この事が後の人生の中で大きな岐路に立たされた時、苦しい局面に立たされた時の自信になりました。学校に行った年数は合計で18年間学校になります。勉強したことは忘れませんでした。しかし、努力すれば報われ

る事を身に着けました。

大学で役に立つのは卒論です。この経験が労働組合のレポートなど作成に役立ちました。大学で卒論を書いたことが、社会に出て必要なことを考えるようになりました。この経験がいろいろな文章、レポート、参考資料を作る時に役立っています。

大学を昭和41年に卒業して広島鉄工会社に入社しましたが、入社条件が違う事が原因で3ヶ月して退社、呉に帰り家におれば、母から毎日のように「大学を卒業しても仕事に行かん」といびられ暗い日々でした。

ぶらぶらしていたら大学の時の友人からワシの会社に来ないかと誘いがあり、広島の縫製会社に就職しました。今思えば縫製会社への就職が次のステップにつながりました。その会社にもマツダ労連傘下の労働組合があり、書記長をしました。

就職して4年たった頃、芦品郡の縫製会社の専務から昭和45年の秋から新市に来て下さいと強く要請されました。行くことを迷い、友人に相談したら府中は田舎なので広島のほうがよかろうと忠告されました。しかし、毎朝6時ごろアパートに電話があり、管理人が呼びに来てく、渋っていたら給料は30%以上アップ、社宅は建てますと条件を次第にアップ、熱意にほだされて昭和46年4月から新しい会社へ就職しました。昭和46年4月に妻と長女と3人で新市町の雇用促進住宅に住み、小野安被服株式会社に転職しました。その時会社の友人が広島から府中への引越しを手伝ってくれた事を思い出します。

小野安被服株式会社は工場を拡張して従業員300人を超える勢いで発展途上でした。ゼンセン同盟加盟の労働組合ができて1年たった頃でした。私も組合員で職場集会に出て発言をしていました。そんな事もあり組合長に推薦され組合長になりました。広島縫製労連に加盟していましたので組合長会議に出席して意見を述べていました。

呉造船所で働いていた頃は高度経済成長の時代で毎年高い賃上げ、一時金を獲得していき。呉造船労働組合は総評系傘下で激しい闘争を毎年繰り返し、闘争時は職場活動が活発でした。春闘、一時金の時はストが積極的に行われた。養成工時代、朝入門時守衛さんが今日はストなので君らは帰れと言われた事が記憶に残っています。昼の食事中には職場委員が毎日ニュースを配布して、交渉内容を報告して、会社の態度を強く攻撃し、私はこの時、会社に対して攻撃的でないといけないのかと疑問に思いました。

社長は新年の年頭挨拶を聞く時にみな顔をみます。挨拶の記憶は、「何事にも名優の演技をなささい。私のビルに大学生アルバイトのエレベーターボーイがいるが、たいぎ、たいぎでやっている。何の仕事でも熱をいれてやって欲しい。」正木社長は文学博士で後の東京都の名誉市民になりました。社長は立派な人と感じていました。社長の印象は紳士的でした。それに対して労働組合は攻撃的で、もっと平和的に話し合いをしてはどうかと疑問を感じていました。この思いが組合の仕事についても影響するのです。

組合長になってから広島縫製労連の専従になってくれと誘われました。労働組合の仕事をする気はありませんでした。それは大学で勉強した生産管理、工程管理、品質管理、損益計算書、貸借対照表、原価計算所などからの経営分析などを活かしたいと思っていました。

広島縫製労連の専従 次々と倒産

熱心な誘いをうけて会社を辞め、広島縫製労連の専従として昭和50年4月1日から事務局次長として就任しました。昭和50年10月の大会で事務局長に就任。

その当時は金もなく組合費が何ヶ月も未納の組合が沢山あり、給料日に事務所に金が無い事がよくありました。事務所には電話機がある程度、印刷機は謄写版です、呉造船時代の体験を生かしてガリ版で組合ニュースを流していました。ニュースの効果を加盟組合に認めていただき、印刷の機械を買う予算の承認を得て、次第に充実していきました。現在の労連シップを発行する動機です。私は「ペンは剣より強し」の仏国のことわざを信じています。

その当時はゼンセン同盟も力と政策でスト権行使、要求を聞き入れなければストをしきりに指導しました。当時は総資本と総労働の対決、労働の資本家による搾取など資本家が利益を労働者から搾取していると宣伝は盛んでした。闘争指導は激しかった。全国的にもストは頻発していました。

その当時の組合員数は広島が30組合1,643名、九州が15支部1,550名で合計3,193名の所帯でした。所帯は大きかったが組合と労連の関係も難しく、また経営者の中には専従者も増えて備後産地は衰退するなどの発言もあり、労使関係は悪化していました

経済状況は昭和48年に第4次中東戦争が勃発して秋には第1次石油ショックが発生。石油が1バーレル2.1ドルから11.6ドルに急騰し、消費者物価は30%以上の上昇になり、インフレにより商品の売り惜しみが発生して物価が上がる一方、トイレットペーパー、洗剤は品切れ状態、益々物価が上がる「狂乱物価」となりました。

その結果企業は物価高騰で大もうけです。昭和48年冬期一時金は全社3.5ヶ月+αで最高はクロダルマ、クレヒフクの3.5ヶ月でした。一時金獲得は過去最高でみんな喜んだのでした。しかし、その興奮はつかの間、一時的に物価が暴騰してインフレになり、その後来たのは暴落です。暴落の結果企業倒産が相次いだのです。インフレの怖さを体験しました。

昭和47年の全国倒産件数が6,900件、昭和51年には16,600件3倍増加です、失業者が増大しました。中小企業はぞくぞく倒産しました。倒産続出で失業者が増大。広島縫製労連の加盟組合も続々倒産していきました。

小林縫製（株）倒産

広島縫製労連加盟組合も続々と倒産し、倒産対策でおわれました。最初に小林縫製（株）が50年10月倒産。当時盛んに言われたのが企業間信用に膨張、信用限度を超えた取引が盛んでした。小林縫製も典型的な限度額を超えた取引がショートして倒産に至った例。企業間信用の膨張が倒産に至るのです。

債権者が不当に手形を抑えている事に反発して弁護士を擁して裁判所の仮差し押さえをする、広島銀行が仲裁に入り折半としました。騒ぎは広がり地域の話題になりました。長い闘争で落伍者もでるので組合員をまとめることに苦心しました。長期間の緊張1ヶ月間が続き、未払い賃金、一時金、退職金を確保しました。小林縫製の組合員から大変喜んでいただきました。

出原商店（株）倒産

昭和51年1月出原商店が倒産、会社は明治以来の老舗で備後縫製の発祥と言われ、名門でした。負債総額26億2千万で当時は大型の倒産で、組合員数126名が労務債権確保の闘争を冬の寒い日が続く中を24時間体制で行いました。

1月の寒い日が続く中、工場敷地で焚き火をして組合員が待機し、団体交渉は深夜まで及ぶ事は度々で徹夜交渉が幾晩も続きました。交渉は要求額が高い、そのように出せない、出せの繰り返しで何晩も続きました。責められる方もつらいが、責める方もつらいお互いの厳しいせめぎあいでした。

その結果、退職金152%、冬期一時金、解雇予告手当で1ヶ月、帰郷旅費など総額1億5千万円の労務債権を確保することができました。

☆ 後日談として管理職の部長には債権者委員会は経営責任として退職金を支払わない事になり、部長たちは裁判所へ告訴しました。

大福被服飯塚工場閉鎖

昭和52年3月に大福被服飯塚工場閉鎖、オイルショックで昭和49年から赤字が続き継続困難で閉鎖。3週間に渡る交渉の結果、退職金200%、夏期一時金、解雇予告手当、再就職支援金、有給休暇の買い上げなど労務債権を確保しました。

政治活動

昭和53年5月14日投票府中市議員選挙に広島縫製労連伊藤会長を推薦、初めて縫製労連から立候補者を出すことで大変に苦労しました。伊藤候補に対して府中地区同盟が推薦について難色をしめし、大変なもめようでした。当時は地区同盟から繊維・木工・鉄工からそれぞれ立候補者がありました。

新人伊藤は大変に苦戦でしたが849票で初当選。その後2期目の選挙昭和57年5月9日投票、1,104票。3期目昭和61年5月11日投票805票27位当選しました。

松石（株）倒産

昭和54年11月5日、朝一番に松石労働組合の組合長、書記長が縫製労連事務所に来まして「社長が本日倒産するので、広島縫製労連に宜しく頼むと言ってくれ」と通知してきた。直ちに社長に会い、譲渡書、念書、委任状等を交わしました。倒産のときはすばやい対応がその後の行方を決めるので迅速な対応をしました。倒産は火事と一緒に手遅れは被害を大きくするだけ。直ちに闘争体制で会社の在庫品、原反、機械など労務債権として、他から持ち帰られることを防ぐために押さえるのです。

社長は一時金、賃上げ等の団体交渉のとき、君らは暴力団のようだとこのしり交渉をてこずらせました。交渉を終えて私が事務所を出る時に社長の奥さんが経理をしていたので、事務所におられ、交渉で社長をいじめたと思っていたのでしょう。事務員に塩を持ってきて撒くように言っているのが聞こえました。ナメクジではないと言い返したい思いで事務所を出ました。そんな労使関係でしたので、まさか倒産の時、広島縫製労連に要請があるとは思わなかったのです。この理由は倒産したら社長の権限は一切なくな

る、債権者に退職金分まで取られてはいけない、社員に払ってやりたいとの思いで、縫製労連に労使で要請したのです。もう一つは前年に出原商店が倒産して広島縫製労連の総力で闘い、退職金を獲得した事も影響したのでしょうか。5日の晩には債権者委員会ができました。社長の実印があるときに念書、覚書などを交わしていたので、債権者委員会との交渉が有利になりました。

11月5日には会社の広場縫製労連の仲間を多数集めて決起集会をして団結と支援を呼びかけました。

債権者集会では50名以上が集まり、労務債権の要求が多いと言われ、債権者から何を考えているかと非難を受けましたが、第4回債権者委員会（11月24日）との団体交渉で解決しました。退職金は規定の150%、解雇予告手当、冬期一時金などを確保し、組合員から感謝されました。

☆ 沢山の元組合員が縫製労連事務所にきて、彼女たちの説明は社長から組合費が高かろう、組合を脱退しなさい。組合員の扱いをするからと言われ脱退した。脱退期間3年分の組合費を払うから組合員に戻してくれと度々要請された。債権者委員会は厳しいのでとてもそんな事は出来ないと断った。

☆ 債権者委員会で労働組合も労務債権の要求をくずさなかった。「ワシは組の者、手形を持っている債権者じゃ、労働組合は権利を主張するな、オマエは福山の町を歩けんようにするぞ」と脅された。怖いと思ったが脅しには負けないと内心びくびくしながら組合員の前では強気を装った。そのほかにも一般債権者から労働組合への非難があった。負債超過の中での戦いの厳しさはすごかった。

☆ 後日談として、元社長宅へ深夜2時から3時に債権の督促がやって来た。はじめ当家は恐れて府中警察に電話したが、貸した金の督促だと言い、家宅不法侵入、器物破損もなく、罵声を浴びせるだけでは、警察は何も出来なかった。深夜の督促はその後も続き、社長は参ったのであろう。

☆ 倒産後1年して元社長は亡くなった。その後奥さんも亡くなった。元社長夫婦は大変に仲良く福山への買い物でも夫婦揃って出ている。また毎日、夫婦揃って出勤、仕事後は夫婦が戸締りして一緒に帰る。そんな姿を何度もみた。仕事熱心なおしどり夫婦だった。

☆ 松石（株）は縫製で成功してお金を儲けた。このまま行けば農協の理事長は約束されていた。不動産に手を出して当たり、急激な土地の値上がりで大もうけした。その結果、府中税務署管内で1位の高額所得者になり府中地区の話題の人だった。縫製会社の社長が1位なので縫製は儲かるのでないかと言われた。不動産投資を続けて、買い続けた後に大暴落が起こり、大損が出て会社が行き詰まった。急激な経済変動による典型的倒産であった。

ストライキを決行

昭和54年の秋から第2次のオイルショックで物価は20%以上の上昇、昭和55年賃上げ交渉、21組合11支部の集団交渉で第4次回答6.1%を不満として昭和55年4月18日の始業時から2300名24時間全面ストライキに突入しました。17日の深夜まで交渉して始業時初めてストを各組合、九州の全支部へ連絡、先方から

問いあわせなど、てんやわんやでした。翌日の夕刻から再度交渉してプラス1650円（11月度実施）で決着しました。

このストでは長崎県島原半島にあった後藤被服の支部、山陽スラックス、マルカの3組合がストをする組合についていけないと広島縫製労連を脱退しました。

スト後2ヶ月もたたないで脱退通知を受けて後藤被服島原支部へオルグに行った日は、今まではご苦労さんと言って鄭重に応接室に通して用件を済ませ、昼休みに職場集会をして活動報告、意見交換をしていたのがスト後は門前払いで会ってもらえませんでした。

全員の署名入りで弁護士を立てての強力脱退を進めました。この事をゼンセン同盟に直ちに連絡しましたが何の指示、方法もなし、あなたまかせ、熊本県支部長は電話で私に何故ストをしたのかと怒りをぶちまけるだけで、話し合いも何もあったものではないありさま。

島原半島にあった山陽スラックスが55年11月、マルカ長崎が56年2月に組合解散、脱退しました。

山陽スラックス労組から脱退通知があり、撤回を求めるオルグに行ったら、それまでは愛想良く迎えてくれていて日頃はおとなしい人が、こんな事を言うのかと想像以上の変わりようでした。「こんにちは」と言ったら途端に玄関に男子全員が集合して、「帰れ、何しに来た」と罵声で酷い仕打ちでした。その後は郵便物がダンボールに詰められ受け取り拒否で度々返ってきました。

激しい経済変動で運動は変化

この当時、春闘は闘争的で実行使も盛んに行われました。「総労働対総資本の対決、資本家による労働の搾取反対」などをスローガンとしました。昭和30年代の高度成長は闘ったら取れた時代のなごりを残していました。ゼンセン運動も力と政策を柱として活発な闘争指導を行い、大会では果敢に戦った組合をたたえていました。

全国のストライキ実施状況は昭和45年（1970年）2,256件ピークは昭和50年3,385件、昭和55年（1980年）1,128件で平成7年（1995年）208件と減少してきました。最近ではストを実施するのはまれになりました。

経済は昭和34年から昭和47年までは二桁成長で高度経済成長を達成。昭和35年に池田内閣のもとで所得倍増計画が発表され国民所得を昭和47年に倍増が達成され、国民生活は豊かになり3C時代などカー、クーラーなどがどんどん売れて好景気が続き豊かさを謳歌しました。戦後の荒廃から抜け出して変貌をとげました。10年以上の高成長が終わりを告げ、好況で浮かれていた国民をどん底にたたき落としたのはアラブの王様、中東の原油が一挙に5倍以上の値段になり、オイルショックが経済ショックになりました。

労働者が振り落とされ失業者が続出したのは昭和48年第1次のオイルショックで、狂乱物価と物不足の大変な年でした。昭和49年には戦後初のマイナス成長でした。昭和51年には16,600件の倒産、昭和52年には17,900件の倒産で失業者が続出。昭和54年（1979年）第二次オイルショックが発生。物価は再び高騰し、インフレで物価が高騰。国民はまともに働いている人でも給料の目減りで生活に四苦

八苦の状況でした。

オイルショックから抜け出して昭和50年から低成長時代がやってきました。平成2年までは5%程度成長を維持、平成3年からはマイナス及び2%程度の成長になり低成長になりました。

平成8年頃からリストラが全国的に発生して失業率は5%を超える状況になりました。パート、アルバイト、フリーターなど非正規雇用労働者が出現、成長の時代の年功序列、終身雇用の制度は完全に崩れました。同じ労働者でも雇用形態で大きな開きのある格差社会がきました。経営者はグローバル競争時代で賃金を上げられない、低賃金層が出現、国際競争にうち勝つためには人件費は上げられない、グローバルスタンダードになるにはコストは上げられないというのです。

最近是非正規雇用労働者も就業者なので失業率は4%代に減少して雇用状況は好転してきました。

クロダルマ本社工場閉鎖

昭和58年3月22日に会社から工場閉鎖の通告を受けました。5月10日に第1回交渉から4日間の連続交渉で深夜まで続き、緊迫した交渉が連夜でした。工場閉鎖、全員解雇反対を貫き希望退職として退職金200%、夏期一時金、有給休暇の買い上げ、解雇予告手当、協力金などで解決しました。

第19回定期大会

昭和62年11月3日広島縫製労連第19回定期大会で私は会長に選出されました。専従事務局長を12年、専従会長として出発しました。ゼンセン県支部が会長は非専従がいいと主張しましたが、経営者協会会長は責任を持ってやってもらうためには専従が望ましいとの発言がありました。結果的には経営者の考え方が良かったのではないかと、昭和40年代にゼンセン同盟方針として産地連合会を作る、組織化して同一労働同一賃金の確立のために全国に沢山連合会を作りました。当時作った連合会は解散ないし名前はあがるが機能してない、脈々と続いて活躍・活動しているのは広島縫製労連のみとなりました。

経営者協会は故出原誠三会長の時代、会長は積極的であり、ザックバランな人柄で、労使関係に力を入れられました。踏み込んだ意見をされ言われた事を大事にして、労使関係を維持するには経営者の意見を大事にする事も大切に思っていました。当時の現勢は21組合9支部1,719名でした。

大きな活動方針は広島縫製労連結成20周年記念を開催することを決定し、平成元年11月12日に結成20周年記念式典を府中文化センターで盛大に挙行了しました。

来賓にはゼンセン同盟の芦田会長、出原誠三経協会会長、岡田衆議院議員(故人)、柳田衆議院議員、小西参議院議員、赤松広島友愛同盟会長、橘高府中市長、藤原新市町長らから賛辞を頂きました。20周年を祝して経営者協会からも100万円の祝金を頂きました。この事は今に語り草です。このような多数の祝福と激励が労働運動の価値を高めて意義を認めたことで組合員への大きな励みになりました。

カマクラ（株）倒産 平成5年8月

3年前に工場が火災に遭い、新工場を建設して稼動したが業績が低迷して資金繰りがうまく行かず、新工場建設費が重くのしかかり、資金繰りに困り、倒産にいたしました。昭和32年に創業して35年目で幕を閉じました。

負債5億3,000万円。資産2億1,000万円で3億2,000万円の負債超過の中で、労務債権6,800万円の要求をして6,200万円で債権者委員会と合意しました。規定退職金の130%も確保。

労務債権確保闘争は6月11日に倒産して債権者委員会と10月5日の第6回の交渉で解決。およそ4ヶ月に及ぶ長い闘争で要求する側も長い緊張が続きました。闘争参加を拒む人も現れ、債権者委員会からは労務債権額が多いと度々抵抗されました。破産に持ち込むと度々警告されて、破産やむなしで進めました。広島縫製労連に対しては債権回収の協力を要請され、全国に散らばっている8社の得意先に支払いを督促しました。今後商品が続かないことを理由に40%、50%に値引きして支払う、中には長いことお世話になったと全額支払ってくれたところもありましたがまれでした。債権回収にも努力しました。

幸いにも土地が売れて労務債権に充当できることで解決しました。長い闘いでしたが、組合員から大変に喜ばれました。

神谷被服（株）企業閉鎖 平成5年8月

8月11日午前8時に社長から工場閉鎖により全員解雇を言い渡されました。突然で組合役員が興奮した面持ちで広島縫製労連に駆け込んできました。

8月30日3回目の交渉で退職金は規定の140%、解雇予告手当1ヶ月、夏期一時金など含めて解決しました。

ツーエイト（株）工場閉鎖 平成5年11月

1年前から業績が悪化して11月に工場閉鎖の提案が行われました。雇用継続を強く求めましたが聞き入れられず。12月19日第5回交渉で組合員14名の労務債権総額8,099万円、退職金は規定の170%で解決しました。

広島サンダイヤ（株）工場閉鎖 平成9年11月

クロゾウから広島サンダイヤに経営者が交代して工場閉鎖に至りました。累積赤字が大きく、これ以上経営持続が出来ないと閉鎖の提案がされました。

団体交渉のときは全員待機で女性も交代で参加して次第に雰囲気は重くなり、被害者意識も高揚して交渉委員も熱を帯び経営者も真剣そのものになります。赤字が大きいので退職金100%しか出せないとの要求を強く拒否。第4回交渉で激しい交渉の結果、規定退職金165%、その他含めて総額11,900,000円で解決しました。

府中市議員選挙に落選

平成10年4月26日施行の府中市議員選挙に出馬しました。9年12月に同盟推薦の岡村市議員が突然に事故で急逝されました。同盟として後継者を擁立する事を決

定し、後継候補として推薦していただき、力強く活動を展開いたしました。沢山の皆様から協力を頂きましたが票に結びつかず結果は339票で落選しました。

準備や対策が不備と批判を頂きましたが、私としては努力しました。

働く人の代表として市政に反映させて皆様のお役に立てばと思いましたが、私の気持ちが届かなかったようです。落選した時は苦しい思いしました。仲間の皆様が心強く激励してくださり、次第に元気を取り戻しました。

選挙に出て新たな視点で人に接することは大変良い勉強になりました。その後の労働運動、組合員との関係、経営者との関係などに活かすことができました。

広島衣料（株）工場閉鎖 平成12年11月

広島衣料は日本衣料の広島工場でしたが、日本衣料が倒産して伊藤満（株）の子会社となり広島衣料として発足、広島縫製労連に昭和54年に加入しました。

加入当時は業績も好調で一時金はAクラスを維持していましたが、バブルが崩壊して急速に業績が悪化し閉鎖を通告してきました。

1ヶ月間に7回の団体交渉を行い、6億円赤字で出せないとの回答でしたが粘り強い交渉で規定退職金プラス加算金、有給休暇の買い上げなどを行い、規定退職金140%を確保して解決しました。

自重堂松浦工場閉鎖 平成11年12月閉鎖撤回

平成10年12月、会社より松浦工場の赤字が増加して会社としてこれ以上の損失を増やすことは出来ない、来年3月には松浦工場を閉鎖するとの通告。

松浦支部労働組合は閉鎖反対を決定、仕事がなくなる、これからの生活が出来ない、永年勤務して愛着があるので存続を強く求めました。

今福町にある工場は町内唯一の工場で町として大変な損失になると心配しました。町民の最大関心事となり、話題を地元新聞にも掲載されました。

世論のバックアップなどもあり、組合員の閉鎖反対の運動が高まり活動が活発に行われました。閉鎖反対のポスター、横幕などを張り闘争は盛り上がりました。

平成11年の1月～3月12日の第4回交渉で組合の閉鎖反対の要求が聞き入れられ、閉鎖は撤回されました。

ワッツ工場閉鎖 平成14年2月

会社から赤字の累積でこれ以上継続は出来ないと工場閉鎖の提案をされて閉鎖の方針を明らかにしました。

会社は規定100%にこだわりましたが解雇では納得できないと4ヶ月間に8回の粘り強い交渉を行い、42名1億3,000万円の規定退職金152%を確保して解決しました。

労使関係の充実

私が広島縫製労連の専従になりましたのが昭和50年4月1日であれから34年が経

ちます。その当時の組合員数は合計で3, 193名30組合と九州に15支部ありました。現在平成19年5月では11組合で550名で当時の20%に満たない組合員です。

当時と比較すると30の会社があったのが今11社です。その殆どが倒産あるいは閉鎖です。民間企業は倒産、閉鎖の宿命を負いますが、人は一生安定した仕事を望みます。中小企業は景気に左右されやすいのです。経営悪化は不況が一番の理由ですが、過大投資など経営の失敗が経営を悪化させるのです。

経営者が個人の場合が多く、家で代々引き継いで行きますので後継者がいない場合、継続が難しい。最大の理由は資本と経営が一致している事で、大企業は資本と経営が分離していることの違いです。そのために社長は最大の出資者で資本家ですから強い力があります。責任も大きいのです。倒産に追い込まれると一族が破滅するケースが多く、経営者も悲劇です。我慢して我慢して継続せずに、経営者は負債が大きくなならない時に決断することが大切です。

平成17年1月に破産法が施行された、債務者保護で破産が裁判所で認定されますと負債が免責になります。破産の認定は負債が著しく多い場合に認められます。最近の倒産は自己破産が多い。自己破産は認定されますと管財人によって債権配当まで決められる、平等配分の長所はありますが、弁護士によって商品、仕掛品、材料などの処分は二束三文で価値を否定しています。労働組合に対しては、債務者への交渉は一切禁止となっています。

広島縫製労連は、昭和45年（1970年）6月に結成して、日本において数少ない労働組合の連合会として活動を継続しております。労働組合の第1の役目は労働条件の安定と向上です。具体的には賃金の引き上げ、期末一時金の確保、退職金の制度化、年間休日の取り決めなどです。これらの労働条件は37年間、取り決めをしていきました。労働条件の取り決めには30年以上の労使交渉があり、その間、決し平坦ではありません。ストもありました、ストに至らなくても朝までの交渉、断続あるいは翌日の再度交渉など激しい葛藤がありました。

現在は交渉に力点をおいています。経営者に理解してもらい、経営者の考えを理解する事に大変なエネルギーが必要であることには今も昔も変わらないです。

労使が信頼できる関係を維持するためには、労働組合が経営者に信頼される、そのために知識、情報を正確に提供する。次には経営者の性格を理解して受け入れられる内容を話す。それぞれの会社、会社で歴史があり、多様な経験を乗り越えています、そのことを知る事が大切です。

交渉が決裂したとしても、自主的解決をめざすことが重要です。自分たちでまとめることが責任をもつことです。簡単に弁護士、労働委員会、労働基準監督所を頼ることは望ましい関係を否定することになります。精力的に交渉を重ねて大きな開きがあれば止むを得ませんが、そうでなければ他力に頼らず自主的判断、自主的解決が望ましいのです。その積み重ねが労使の信頼関係を高めていく事になります。

倒産・閉鎖対策

しかし、近年経済の変化は激しくグローバルスタンダードと言われ国内を乗り越えて国際競争の時代に入り企業の競争は激しくなってきました。

中小企業である我々の会社は経営基盤が弱く景気変動に左右されやすいのです。30社あった会社が現在11社です。中小企業がもろいことを物語っています。

経営者は倒産させまい、企業を継続しようと頑張っています、そして社長自ら従業員の事を思い、家族的経営で温かみがあります。大企業にない良さを持っています。また疾病率においても成人病、生活習慣病などにかかる割合は大企業に比較して低く、労働密度も大企業ほど高くありません。労災事故についても件数は大企業が多く、中小企業は安全です。中小企業の長所、欠点を理解し、生かして仕事のことを考えて行くことが大切です。

景気が悪化して資本力、人材など競争力の低下などで得意先が減少、売り上げが下がり、利益が確保出来ないで赤字が続く、赤字が続けば一時金は払えない、賃上げはできない、労働条件は低下の一途をたどると、いい人材は会社に見切りをつけて辞めていく、戦力ダウン、赤字が3年も続くと倒産に追い込まれます。

今まで何十社の会社が倒産・閉鎖におこまれました、広島縫製労連のウェイトの大きい仕事が倒産対策でした。倒産又は閉鎖になると組合員はいずれも突然の解雇です。組合員にとっては最大の悲劇です。今までに何千人が離職していきました。広島縫製労連は悲劇対策、困った人を助けるのが大きな仕事です。

倒産になって、組合員から聞く言葉は、突然でした、予想しなかったと驚きの表情で訴えるのです。時間とともに苦しみ、悲しみが実感としてわいてくるのです。何とかして下さい、救済して下さいと訴えます。その時、大事な事は組合員から頼りになると思われることです。

解雇の悲劇に対して最大の努力をしても、救済の仕事が大変難しく、困難を極めるのです。倒産・閉鎖の時は殆ど累積赤字が莫大になって金が無い事が前提ですから、我々が要求する賃金、退職金、期末一時金など払えないと要求額の半分、あるいはそれ以下の回答が多いのです。無いから払わなくていいと法律には書いてないと主張して、回答の引き上げに努力します。組合員の気持ちを一つにすることが、相手に対して説得力になるのです。しかし何ヶ月もかかることもあり、不満と不平が一緒になり組合員が脱落していくこともあります。組合が抑えた会社の商品を守るための毎晩宿直、度々の集会、会社に出たの倒産対策などに愛着想かして出てこなくなる例もあります。獲得に熱意を維持しなくてははいけません。

交渉は債権者委員会との交渉が多いのですが、倒産時の貸借対照表、損益計算書など理解は勿論ですが、その時必要な直接の知識は労働組合法など労働三法、あるいは民法、商法、もっと上に行けば労働三権を保障している憲法です。法的知識は経営者を説得する近道です。労働組合を仕事としてやる以上法律の基礎的な部分は理解して身に着けておくことです。

倒産による突然の解雇は、組合員がこれからどうして生活するか、人生に対して大きな不安を抱えます。この不安を解消できないにしても、最善を尽くし、少しでも救済するために、和らげるために結果を出すために努力をしてきました。

組合員の安心を作るお手伝い

組合員の労働条件の安定と向上が労働組合の第一の任務です。組合員が辛抱すれば少

しずつでも良くなると思えば、仕事にも熱が入ります。組合員の安心を作るお手伝いをすることです。

以上